研究ノート

『説文校議』に見える「宋本」と平津館本の関係について

鈴木　俊哉

広島大学大学院総合科学研究科

Relationship between “Songben” in Shuowen Jiaoyi and the Pingjinguan Version of Shuowen Jiezi

Toshiya SUZUKI

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

Abstract

The Chen Changzhi version of Shuowen Jiezi (陳昌治本) has been the most widely referred version of Shuowen Jiezi. Its source, the Pingjinguan version (平津館本, PJG) was criticized by some scholars as being heavily modified from the “Songben” (宋本, Song dynasty version) and not reliable. We can find the quotations of “Songben” in the Shuowen scholars works published just before the publication of the PJG. In this paper, the quotations in Shuowen Jiaoyi (説文校議) are comprehensively collected and compared with the Jiguge version (汲古閣本, the most popular version before the Pingjinguan version) and Wang’s version (王昶本, printed during the Song dynasty), the PJG, and Tonghuaxue (藤花榭本, THX, printed during the Qing dynasty). It is found that the Songben quoted is rather similar, but not identical, to the PJG, rather than Wang’s and the THX versions.

1　はじめに

『説文解字』[1](西暦100ごろ, 以下『説文』)は後漢の許慎によって編まれた、秦代の正式書体とされる小篆を用いた漢字字書である。部首という考え方は『説文』によって定められたと言ってよい。許慎は、当時通行の隷書では、字形の成立過程の理解や部首の特定に困難があると考え、より古い字形を残す小篆を用いたと理解されている。現在では『説文』の述べるところは必ずしも正しくないことが判っているけれども、甲骨文字が発見されるまで、『説文』は漢字の本義を調べる資料としてもっとも権威ある資料であった。このことから、様々な漢字字書には『説文』にあるという理由だけで採録されている漢字も少なくない。人名・地名での用例が無くても、多くの字書に本字・古字として見えるため、日本の行政漢字システムに取り込まれた文字もある[2]。

『説文』自体は、安定して流布してきた文献ではない。説文学が盛んになる都度、稀覯本となった資料に校訂を加えたものが出版され、それが広く流布すると、後に過度の改変を含むと批判されるというサイクルが繰り返されてきた。

清代の説文学において重要な『説文』の版本として、毛扆による汲古閣本[3](1713[1])、と、孫星衍による平津館本[4](1809、以下、孫本)がある。

本稿では、この孫本の改変の多寡についての調査結果を報告する。具体的には、孫本の準備に関わった姚文田・厳可均の『説文校議』[5][2](1806、以下『校議』)に見える「宋本」と、孫本の比較を行い、大きな改変を受けてはいないことの傍証を示す。また、あわせて汲古閣本と宋本の関係についても報告する。なお、本稿は人名・書名も含め新字体に表記を改めている。ただし、小篆を指示する場合と、表 1・表 2 などで『校議』を引用した箇所などではできる限り元の表記を用いた。

1.1 平津館本の底本問題について

現在もっとも広く参照されている『説文』の版本は、清代に翻刻された、いわゆる陳昌治本[1](1873)である[3]。これは当時広く行われていた孫本をもとに、検字の便を図り、小篆見出し字を全て行頭に配するようレイアウトを改めたものである。しかし、孫本はその序文を見ても底本の来歴が明らかにされていない。後に王昶旧蔵宋刊本(以下、王本[4])が影印出版[7](1919)されると、これを孫本と比較する分析が行われた。孫・王本の違いが多数発見された結果、孫本は王本を底本としながら妄改が加わっているのではないかという懸念がしばしば言及されるようになった[8]。場合によっては、鮑漱芳旧蔵の宋本に由来するとされる額勒布の藤花榭本[9](1807、以下、額本)に劣るかのように評される場合もある[10][11][12][5]。

筆者は、前稿[13]にて、孫・王本を比較した先行研究を整理し、それらが差異を指摘する383箇所での額本の状況を調べた。その結果、この3本の差異は必ずしも孫本だけが異なるのではなく、孫本と額本が一致し、同時に王本は異なるという状況も少なくなかった。周祖謨[14]や倉田淳之助[15]の「孫本は王本と別の底本を持つ」という説を支持する結果と言える。

1.1.1 王本以外の宋本と平津館本

孫本の底本は王本と別本であるように見える。しかし、その来歴がはっきりしていないことは解決されていない。額本の底本とされてきた宋刊本であるところの海源閣本[16]を、孫本・額本に差異がある箇所で確認すると、孫本側に一致する場合も少なくなかった。このことは、額本と海源閣本に差があるという王貴元氏の指摘[17][18]を支持する結果と言える[6]。

それでは海源閣本が孫本の底本である可能性はないだろうか。王貴元氏は孫本は海源閣本に由来するという見方を取っているように思われる。この説は、古くは日照丁氏本説文解字(1881)[19]の識語にも見える。識語を要約すれば、以下のようになる。

- 毛晋・桂馥・孫星衍の印記がある宋刊本が海源閣に残る。
- その海源閣に残る本が孫本の底本である。
- この本(日照丁氏本)はその海源閣に残る本を改めて翻刻した。

これについては倉田の検討がある[15]。海源閣楊氏の蔵書録や、現在これを所蔵する北京国家図書館の書誌情報によれば、毛晋・桂馥・額勒布の印記の存在は確認されている。しかし、孫星衍の印記の情報は見えない。また、海源閣に複数の宋本があったという記録もない。このことから、倉田はこの説をそのまま採ることは難しいとした[7]。

しかし、前稿で報告したように、海源閣本、双鑑楼宋刊残本(周祖謨が調査[14])、内藤湖南旧蔵宋刊残本(倉田が調査[15][8])、周錫瓚所蔵宋刊本(段玉裁が調査[21]、以下、周氏宋本)の間には王本と異なりながら相互に符合する箇所が多かった。従って、このグループに属する宋刊本が清代に複数残っていたと見て良いと思われる。孫本の底本が、現存する特定の宋本と結びつくものかどうかは、破損状況なども含めた、慎重な検討が必要であろう[9]。

1.1.2 清代の説文校勘研究と平津館本

それでは、孫星衍と同時代の説文学者の著作にはこれに関連する情報は含まれないだろうか。孫本の序文では、当初、姚文田・厳可均・鈕樹玉・銭坫らに校勘を依頼したものの、最終的には誤りも含めてそのまま翻刻する方針を取ったとされる(ただし小篆に関しては顧広圻が校した)。この経緯については、『校議』の序・後序、厳可均「対孫氏問」[22]、顧広圻『説文弁疑』[23]にもそれぞれの視点で書かれており、厳可均が大幅な校改を主張していたが受け入れられなかったことが読み取られる[10]。

孫星衍が当初校勘を依頼した説文学者は、全員

が後に説文校勘の研究書を編んだ。姚文田・厳可均には『校議』、鈕樹玉には『説文校録』[25](1805、以下『校録』)、銭坫には『説文斠詮』(1807、以下『斠詮』)がある。量の多寡はあるが[11]、これらは全て何らかの「宋本」に言及している。また、基本的に孫本が成る前に執筆されている。従って、彼等が言及する宋本の中に、孫本と良く符合するものがあれば、孫本がその底本に対して大きな改変を加えていないという傍証になるだろう。

この時期の校勘研究に見える宋本および翻刻本に関して、周祖謨は次のように述べる[14]。

至於鈕氏説文校録所云宋本与厳章福説文校議議所云宋本、皆與王氏宋本相近。厳可均説文校議云宋本、即孫氏所遽之本、而兼襲汲古閣説文訂之説。鮑本則介於毛本王本之間、然亦有与孫本同者。蓋彼等皆未述及所見宋刻之版式及其内容、故頗難断定其所也。

『校録』が言及する「宋本」について、周祖謨は「王氏宋本相近」と評する。しかし前稿で報告したように、付録の「説文刊誤」が指摘する状況は本文と異なり、王本よりも孫本に似ている[12]。『校録』が編まれたのは孫本や額本が成る前であるから、孫星衍が校勘資料として提供したものに対する刊誤だったという可能性も考えられる。

本稿で検討する『校議』は汲古閣初印本(1.2.1節で詳述する)に就いて大徐の誤りを正す校勘を行ったものとされる(執筆の経緯や関連研究など、詳細は2章に整理した)。その中に「宋本」という語は300箇所近く見える。しかし、「蓋彼等皆未述及所見宋刻之版式及其内容」と評されるように、『校議』も「宋本」の来歴を説明しない。従って、周祖謨の「即孫氏所遽之本」という評価は、直接的な根拠があるのではなく、交友関係や『校議』が記す状況が孫本に似ていることから判断したと思われる。最終的に出版された孫本に対して厳可均は強い不満を感じていたことを考えれば、仮に孫本の材料となった資料[13]を「宋本」と呼ぶとしても、刊行済みの孫本は「宋本」とは区別するのではないだろうか。

1.1.3 『説文校議』の宋本言及箇所

さて、『校議』が「宋本」に言及する約300箇所という数は、前稿で整理した「孫・王・額本に差が見える箇所」の数と同規模である。しかし、前稿と『校議』の言及箇所を突き合わせてみると、前稿で整理したものと重なるものは40箇所程度である。前稿では周祖謨による孫・王本の比較研究も含めているので、この重なりは少ないように思われる。周祖謨はこの40箇所未満から判断したか、あるいは『校議』の言及箇所を全面的には確認していない可能性がある。さらに、『校議』には複数の宋本が参照されたと思われる箇所も20箇所程度あるけれども、それには触れられていない。全体的な傾向としては周祖謨の判断は整合性がとれているとしても、具体的な検証が必要であろう。

1.2 汲古閣本と宋本の関係について

『校議』がその基盤とした汲古閣本は、孫本以前に広く用いられた版本である。これにも底本問題があるため、本節で詳細を整理する。

1.2.1 汲古閣本の初印本・通行本問題

汲古閣本説文解字に含まれる毛扆の識語によれば、この本は、その父である毛晋が得た宋刊小字本を、毛扆が大字本様式[14]で彫り直したものとされる。出版から約80年後、段玉裁によって、汲古閣本は単に宋刊小字本の様式を変更したものではなく、主に小徐本によって小篆字形や説解を改めていたことが明らかにされた。『汲古閣説文訂』[21](1797、以下『説文訂』)によれば、汲古閣本には数度の改訂が加えられており、最終的に出版されたものは五次修訂本である。その直前の四次様本は、様式は大字本であるものの、その内容は他の宋刊本および景宋写本によく似ていた。従って、第五次修訂で大きな変更が加わったと考えられる。清代の多くの説文研究では第五次修訂以前のものを細かく区別せずに初印本と呼ぶことが多い。以下では研究者が(実際に参照したものが四次様本であるとしても)初印本と呼ぶ場合はそれに従う。また、これと対比する用語として五次修訂本を通行本と呼ぶ。

段玉裁が参照した四次様本は光緒年間に淮南書局から翻刻出版(1881)された。現在では、初印本問題を議論する際にはこれを参照することが多い。この翻刻本には張行孚による校記が附されており、四次様本と通行本に差がある253箇所が列

挙されている。また、これを参照した段玉裁および顧広圻の識語も翻刻されている。

1.2.2 汲古閣本の底本について

『説文訂』は、段玉裁が調査した資料を列挙する箇所で「一曰明趙霊均所抄宋大字本、即汲古閣所仿刻之本也」と記している[15]。また、四次様本と通行本を比較すると、宋刊小字本を彫り直したとする毛扆の識語が四次様本には見えない。この2点から、四次様本までは「明趙霊均所抄宋大字本」(以下、趙氏写本)[31][16]に基づき、通行本は宋刊小字本に基づくという説も行われた。高橋由利子氏は、趙氏写本に残る段玉裁の識語を調査し、段玉裁の語は様式に注目した「趙氏写本、またはその底本となったであろう大字本の様式で、宋刊小字本を彫り直した」という意図と理解すべきで、「四次様本と通行本で底本が異なる」と理解するのは誤りであることを指摘した[32][17]。

それでは、どの宋刊小字本が汲古閣本の底本と考えられるだろうか。まず海源閣本には毛晋の印記が残っているので、これを汲古閣本の底本とする見方がある。一方、『説文訂』が初印本と比較した2つの宋刊小字本(王本および周氏宋本)の比較においては、初印本と符合する箇所が多いのは王本である。また、王本の巻末には、「毛晋所剜即拠此本凡有舛異皆扆妄改」の阮元の跋がある。これらから、汲古閣本の底本を王本とする見方がある。しかし、『説文訂』は255箇所で宋本に言及するのに対し、明示的に王本と周氏宋本の状況を区別している箇所はわずか9箇所にすぎない。これが十分に有意な差と言えるかは明らかでない。

もし、『校議』が宋本を引く約300箇所のうち、大半の箇所で、初印本と王本が符合し、かつ孫本と異なるのであれば、王本が汲古閣本の底本である可能性が高いと言えるだろう。

逆に、『校議』が宋本を引く箇所で、孫・王本が符合し、かつ初印本と異なっているのであれば、初印本は底本と目される宋刊小字本のどちらとも大きく異なっていることになる。すると、初印本の状況を説明するには、四次様本以前の修訂や、趙氏写本との比較なども課題となってくるだろう。

1.3 本稿の目的

以上の背景を踏まえ、本稿の目的を次のように定める。

- 汲古閣初印本と宋本の関係について
  - ➢『校議』が宋本を引く箇所について、初印本と王本を比較する。これにより初印本の底本が(孫本よりも)王本に近いと言えるかを検証する。
- 『校議』と清刊本について
  - ➢『校議』が引く宋本の状況を、孫本と比較する。
    - ✧周祖謨の評価(『校議』の「宋本」を孫本の底本と見る)を定量的に検証する。
    - ✧顧広圻が校したとされる小篆字形について「宋本」と孫本に差がないか確認する。
  - ➢『校議』が初印本と宋本を比較する箇所について、額本の状況を確認し、周祖謨の評価(額本は孫本と汲古閣本の中間的な状態)を検証する。

2章ではまず『校議』の版本および基盤となっている初印本について検討し、3章で宋本の言及状況について見ていく。

2 『説文校議』について

2.1 『校議』および関連諸研究

『校議』序文には以下の経緯が書かれる。

- 厳可均と姚文田は嘉慶初年(1796)から『説文長篇』を編み始めた。
  - ➢嘉慶乙丑(1805)の時点で未完。
- 孫星衍がこれを見たいと欲したため『校議』を編んだ。
- この時点で参照した先行研究は『説文訂』だけである。

この序文では書かれていないけれども、厳可均は『説文訂』出版の3年後に『説文訂訂』(1800、以下『訂訂』)を為し、62箇所について自説との差を述べている。

『長編』は未完成のまま厳可均は1843年に卒する。その翌年から、弟である厳章福が『校議』の補正のため『説文校議議』[30](1861完成、以下『校議議』)を編んだ。

2.2 『校議』の版本について

『校議』は厳可均の序文によれば嘉慶11年(1806)

に成った。しかし、刊行は嘉慶23年(1818)に四録堂類集の一部として刊行するまで遅れる[18]。さらに著者卒後の版本には、咸豊3年(1853)の小学類篇本や、同治13年(1874)の帰安姚観元重刊本(咫進齋本)などがある。この中で、現在よく参照されるのは四録堂本を影印した続修四庫全書本[3]と、姚観元重刊本を影印した広文書局本[26]である。『説文解字詁林』[8]が採用するのも姚觀元重刊本であり、広く参照されるのは後者の系列と言って良いであろう。ただし、『校議』が引く「宋本」を後人が確認できたかには疑問があり、卒後の改変の影響を抑えるため、本稿では続修四庫全書本を主に参照し、不鮮明な部分を広文書局本で補うこととした。

2.3 『校議』が引く「初印本」について

『校議』は初印本に対する校勘研究とされる[19]。しかし、厳章福は蔣維培所蔵の初印本を確認した結果、『校議』の記す初印本の状況と合わないため、初印本ではなかったのではないかと書いている。

高橋氏によれば、初印本とは実際に出版流通したものではなく、最終的な通行本の出版に至るまでの校正作業用に刷られたゲラのようなものである。しかし、『校議』執筆中には淮南書局本のような資料はなかった筈だから、厳可均が参照したものは、段玉裁が参照した四次様本や、厳章福が参照した蔣維培所蔵本と違うということも有り得る[20]。次小節では、『校議』から「初印本」の状況をどう読み取るかを考え、四次様本との前後関係の推定を試みる。

2.3.1 初印本と四次様本の前後関係

『校議』には

琫:「佩刀下飾」、宋本…皆如此。毛本刓改「下」字作「上」。

絜:「束文」、宋本及…同。毛本刓改「文」字作「交」。

のような体例がある。ここでは「毛本」としか言っておらず、初印本と通行本を区別するのか明らかでない。『校議議』は「琫」に関して、

琫: 毛本初印作「上飾」[21]。『校議』所據本作「下飾」。桉「上」是。

と書いており、厳可均の意図するところは「初印本は佩刀下飾に作る」であったと解釈している。『校議』が引く「宋本」はそれぞれ「佩刀下飾」「束文」であるから[22]、汲古閣が宋本に基づいて彫った最初期のものが「佩刀下飾」「束文」だったということも考え得る。もしそのような資料が存在し、厳可均が見ていたとすれば、『校議』の「初印本」は、四次様本よりさらに前の段階の、より底本に近い状態だったと期待できるだろう。

しかし実際には、四次様本より通行本に近くなっている例も見つかる。たとえば巻3下の「殺」部の重文数である。各本の状況は、

- 孫・王本は部首字「殺」の重文として𣪍・敔・𢼸を挙げ「重四」とする。
- 四次様本は同じ重文を挙げ「重三」とする。
- 通行本は𣪍・𣪍・敔・𢼸・𣪍を挙げ「重五」とする。

となっている。ここで、通行本の「重五」は四次様本から通行本へ改訂する際に小徐本から古文・籀文を2字補った改変に合わせた結果と考えられる。一方、『校議』は

重五: 宋本作「重四」而實重三。蓋大徐原本有𣪍體、彫板時脱耳。

と書き、初印本は「重五」としている。四次様本より前の汲古閣本の状況を考えると、宋本そのままの「重四」にするか、あるいは四次様本のように実際に合わせた「重三」にする理由はあっても、「重五」とする動機はない。一方、『説文訂』は、𣪍・𣪍の出入りは記すけれども、重文数については四次様本と通行本に違いがあることを記さない。「琫」字についても、『説文訂』は

琫: 佩刀上飾。兩宋本、葉本、趙本、五音韻譜、集韻、類篇、「上」皆作「下」。…毛本依小徐作「上」爲是。

という書き方である。これは、「毛本」が初印本・通行本の両方を指すとするか、通行本のみ指すとするかで、推定される初印本の状況が変わる[23]。我々は段玉裁がこれを書くときに参照していた四次様本を、淮南書局本によって見ることができるので、ここでは段玉裁は「毛本」で両方を指していたことを知り得る。しかし、通行本と『説文訂』しか見ることができなければ、「毛本依小徐作」と書いていることもあり、「初印本では下だったものを、通行本では上に改めた」と誤ることも有り得る。この問題から連想されるのが、淮南書局本にある顧広圻の識語である。次小節ではこれと

の比較を考える。

2.3.2 淮南書局本の顧広圻識語との比較

『訂訂』が成る1800年の5月に、顧氏は周錫瓚から四次様本を借り、『説文訂』に関わる識語を書いて返している[24]。具体的には「初印本が正しく通行本が誤るのに、初印本に明確に言及しない」「初印本も通行本も誤るのに、初印本が正しいと書く」のような、初印本の状況を誤解させる箇所をいくつか指摘している。この問題は高橋氏により以下のように分析されている[34]。

- 『説文訂』は、もともと宋刊本などを利用して通行本と許慎原本の差を示すことを意図したものだった。
- 『説文訂』が完成に近づいてから四次様本を確認する機会を得たため、初印本の情報は後から挿入した。
- 本来の意図は、初印本の様子を詳述するものではなかったので、通行本と初印本の差異を全て書き出したわけではない。

この問題に関する厳可均の立場を見るため、顧氏の指摘箇所に『訂訂』『校議』での言及状況を追加したものを表1に示した。

表 1: 淮南書局本で 顧広圻が指摘する『説文訂』問題点と厳可均著作の状況

見出し字の項にある数字は高橋氏の論文[34]での通し番号である。

『校議』が引く所の「初印本」は全て(実際の初印本との対応関係に疑問があるため)括弧書きとしている。

見出し字	説文訂	顧広圻	説文訂訂	説文校議
51 譱	葉 12.行 01 「此與義美同意」。宋本…同。今依小徐剜改作此「義與美同意」、大誤。	**初印本は正しく、通行本は誤る。『説文訂』はこれに言及しない。**	言及なし	巻 03 上.葉 09 右.行 05 **「此與義美同意」、衆本及…皆同。毛本刓改「與義」作「義與」、依小徐也、誤。** 「初印本」は『説文訂』の宋本等に同じ。
75 舊	葉 16.行 13 「許流切。徐鍇曰今借爲新舊字」。宋本…皆無此十二字爲長。毛本臆增之耳。	**同上**	言及なし	巻 04 上.葉 07 左.行 03 **「許流」下十二字、各本無。** 「初印本」は『説文訂』の宋本等に同じ。
77 殺	葉 16.行 18 「夏羊牡曰殺」。兩宋本…皆作「牡」、不誤。毛本作「牝」…	**同上**	言及なし	巻 04 上.葉 08 右.行 05 **宋本及…作「夏羊牡曰殺」。毛本改「牡」作「牝」。…** 「初印本」は『説文訂』の宋本等に同じ。
87 肛	葉 18.行 18 「胷骨也」。按宋本…皆同。今毛本依小徐「骨」作「肉」…。	**同上**	言及なし	巻 04 下.葉 04 右.行 05 **當作「匈骨也」。宋本及五音韻譜…作「胷骨也」。此作「胷肉」誤。** 「初印本」の状況は不明。「匈骨也」だったのであれば「當作」は不要の筈。
117 𣪍	葉 25.行 01 「日初出東方湯谷…」。初印本作「湯」。宋本…皆同。…今剜改「湯」作「暘」…。	**『説文訂』が「初印本作湯」とする。初印本については誤り。**実際には初印本も通行本も「暘」。	言及なし	巻 06 下.葉 01 右.行 03 **「湯谷」。宋本及玉篇…皆同。毛本刓改「湯」字作「暘」…議依初刻。** 「初印本」の状況は『説文訂』が誤った初印本に同じ。
212 滮	葉 45.行 14 「詩曰滮沱北流」。初印本如此。…今剜改「沱」字爲「池」字。	**『説文訂』が初印本は「滮沱」で通行本は「滮池」とする。初印本については誤り。**実際にはそれぞれ滮池、澎池。	**今毛本作「澎」、當訂。**	巻 11 上.葉 09 右.行 01 **「滮沱北流」。…毛本初刻作「滮沱」、刓改作「澎池」。** 「初印本」の状況は『説文訂』が誤った初印本に同じ。
250 丿	葉 54.行 12 「房密切、又、匹蔑切」。初印本如此。宋本…但云「房密切」。趙抄本…作「房密切、又、匹蔑切」、多四字。今剜改「房密切」爲「於小切」…。	**初印本が「房密切、又、匹蔑切」で通行本が「於小切」とする。初印本については誤り。**実際には初印本も通行本も於小切。	言及なし	この見出し字に関しては校語がない。あるとすれば巻 12 下.葉 08 左付近にあった筈だが、3 字前の「民」と 3 字後の「弗」について連続して書かれている。
296 侖	葉 65.行 07 「古文甲始於一見於十成於木象」。惟毛本如是。…毛本依小徐、改「十」爲「一」、改「千」爲「十」…。	**「毛本如是」とする。通行本については誤り。初印本に言及なし。**	言及なし	巻 12 下.葉 04.行 01 **宋本及…作「始於十見於千」、語難通。小徐作「始一見於十歳」。據通釋…元無「歳」字…。** 「初印本」および毛本に関しては言及なし。

まず最初に編まれた『訂訂』を見ると、顧氏が指摘したような問題は言及されていない。「滹」字のように、通行本の状況を誤って記す場合には訂正しているので、初印本の状況を誤って記したことが判っていればこれを訂正した筈であろう。

後に書かれた『校議』はどうだろうか。「初印本が正しく通行本が間違っているのに、初印本について述べない」箇所については、『説文訂』が正しいとする（四次様本に符合する）状況を書いている。しかし、『説文訂』が初印本について間違った状況を書いている場合も『説文訂』と同じ（四次様本と異なった）状況を書いている。この状況を、「段玉裁は『説文訂』に誤ったことを書いた。しかし、それとは独立に、『説文訂』の記述と同じ状況になっている初印本もあって、厳可均はそれを見た」と説明することも可能ではある。しかし、そのような未確認の初印本を想定しなくても、「厳可均は、『説文訂』の毛本とは全て通行本のみを指していると解釈し、毛本刓改、毛本作などの語を全て五次修改での変更を意味すると理解し、その理解に基づいて初印本の状況を推定した」としても説明できるのである。

表1に示すものの他にも、淮南書局本と通行本に差がありながら『説文訂』が何も言及しない箇所がある。その箇所で『校議』が初印本の状況として記すものは大半通行本と同じである[25]。このことから、『校議』のいう「初印本」とは『説文訂』と通行本から推定したもので、実体のある資料に依らない可能性は排除しきれない[26]。

2.4　本稿での『校議』が引く資料の取扱い

以上のように、本稿の調査範囲で考えた場合、『校議』の言う「初印本」の情報には様々な疑問が残る。通行本以前の汲古閣本の情報を『説文訂』以外に得ていたかを検証するには、通行本との差を記す箇所を全て確認しなければならない。この問題は作業量の多さから今後の課題にゆずり、本稿では「宋本」の言及箇所について淮南書局本および通行本と比較するだけとした。この段階で宋本と異なる部分が非常に多いとすれば、四次様本から底本を王本と推定するのは難しいということは言えるだろう。

さて、『校議』の言う「初印本」を疑うならば、「宋本」も疑わねばならない。しかし、「殺」部の重文数で見たように、『説文訂』で言及しない箇所においても宋本が参照されている箇所は少なくない。このため、『説文訂』以外にも何らかの別の情報源があったと思われる。ただし、『説文訂』を孫引きしたものが部分的に混ざっている可能性は排除できない。

3　調査結果

『校議』が宋本を言及する箇所と、それに対応する汲古閣本(淮南書局本、通行本)および孫・王・額本(以下、この3本をまとめて汲古閣本と区別する際に小字本と呼ぶ)の状況を表2に示した。『校議』が「宋本」を記す297項のうち、『説文訂』で言及があるものは171項、言及がないものが125項、「宋本」と書くが説文以外の資料の「宋本」であったもの1項である[27]。

3.1　四次様本との比較

まず、言及箇所全体で見た場合、四次様本と小字本の符合状況は以下のようであった。

A）孫本と符合する箇所　91
B）王本と符合する箇所　98
C）額本と符合する箇所　131
D）孫・王本と符合する箇所 $(A \cap B)$　76
E）3本全てと符合する箇所 $(A \cap B \cap C)$　63
F）孫・王本と異なる箇所 $(\overline{A} \cap \overline{B})$　188
G）3本全てと異なる箇所 $(\overline{A} \cap \overline{B} \cap \overline{C})$　138

まず目立つのは、『校議』が「宋本」を引く範囲では、四次様本は孫・王本のどちらとも異なる箇所(F)が188/297と6割以上あることである。周祖謨が、王本よりもさらに汲古閣本に近いとした額本を含めても(G)、これらの小字本と異なるものが全体の4割を超えている。張行孚が整理した、四次様本から通行本への変更253箇所よりは少なく、また、見出し字の増減といった甚だしい変更は無いけれども、宋刊小字本から四次様本に至るまでにある程度の変更が加わっている可能性がある。

表 2:『校議』に見える「宋本」と汲古閣本および宋刊・清刊大徐本との比較

『校議』に見える「宋本」と汲古閣本および小字本の状況と、『校議』の校語を以下に示す。各カラムは以下のようである。正文数、重文数などに関しては算用数字で置き換えて表記している。文字があるべきところが空白になっている場合は「( )」のように書き、その箇所が詰められていて空白もない場合は(欠)と書く。ISO/IEC 10646 に含まれない漢字に関してはできるだけ IDS[36]で表記している。ただし、字形が複雑なもの、判読が難しいもの、小篆に関しては画像で示す。

巻: 大徐本で親字が収録される大徐本の巻号。巻 1 上を 01a、巻 2 下を 02b のように書く。標目巻は 00x とした。

訂#: 『説文訂』での見出し番号。高橋氏の分析[34]との対応の便のため加えた。

前#: 前稿[13]の比較表での通し番号。下線が引いてあるものは、親字は一致するけれども、『校議』は前稿での指摘に触れないものである。

『校議』が記す「宋本」の情報: 『校議』の校語から宋本に関わる部分を抽出した。また、何と対比しているのか明らかでない部分については適宜括弧でくくり補足を加えている。また、校語の内部で小篆字形を問題にする場合は画像を貼り付けている。基本的には続修四庫全書の画像を示す。ただし、読み取り難い場合は広文書局版の画像をさらに括弧つきで追加した。

宋本差: 『説文訂』『校議』が複数の宋本について述べている場合、その状況の種別を示す。詳細は本文3.2節を参照されたい。

淮: 淮南書局による汲古閣四次様本の翻刻。京大所蔵本での状況。

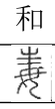
毛: 汲古閣通行本(五次修訂後)。早稲田大学古典籍データベースでの状況。

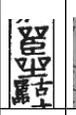
孫: 平津館叢書本、五松書屋本。国立公文書館所蔵本での状況。

王: 王昶旧蔵本、四部叢刊影印本での状況。

額: 藤花榭本。早稲田大学古典籍データベースでの状況。

『校議』に符合するもの: 『校議』が記す宋本の状況に符合する小字本を列挙した。「無」は、符合するものがないことを示す。『校議』が引く宋本の数を明示するために括弧で括っている。「(孫,王),(額)」のような表記は、『校議』が 2 つの異なる宋本の情報を書いており、一方は孫本・王本に符合し、もう一方は額本にしか一致しないことを言う。

	巻	親字	訂#	前#	『校議』が記す「宋本」の情報	宋本差	淮	毛	孫	王	額	『校議』に符合するもの
1	00x				(標目巻は宋本で追加されたと考えられること。特に汲古閣本との比較ではない。)							
2	01a	一			太始宋本作大始		太	太	太	太	太	(無)
3	01a	帝	1		古文諸上字巳下疑後人校語辛示毛本初印與宋本同後于辛下刓增言字依小徐也當從初刻		(欠)	言	(欠)	(欠)	(欠)	(孫,王,額)
4	01a	下			(毛本の説解「篆文下」に対し)宋本作篆文丅		下	下	丅	丅	下	(孫,王)
5	01a	福			祜也宋本作祐也		祜	祜	祐	祐	祜	(孫,王)
6	01a	玉	3		宋本專作專隸省毛本刓改專字作專依小徐也		專	專	專	專	專	(孫,王)
7	01a	琫	5		佩刀下飾宋本…皆如此毛本刓改下字作上		上	上	下	下	下	(孫,王,額)
8	01a	瑟	6		(毛本の瑟に対し)宋本及…作瑟彼玉瓚旱麓釋文不云説文作瑟知舊本無異文段玉裁玉裁説文訂云…		瑟	瑟	瑟	瑟	瑟	(孫,王,額)
9	01a	中		12	宋本作而也…今此作本和也		和	和	而	而	和	(孫,王)
10	01b	毒			(毛本の毒に対し)宋本篆作 ( )誤							(孫,王)
11	01b	熏			熏象也宋本作熏黑也誤		象	象	黑	黑	象	(孫,王)
12	01b	蓋			宋本作而涼涼此凉不體		凉	凉	涼	涼	涼	(孫,王,額)
13	01b	萇	8		(毛本の銚弋に対し)宋本作跳弋…皆誤		銚	銚	跳	跳	跳	(孫,王,額)
14	01b	若	10		宋本牛作井誤		牛	牛	井	井	井	(孫,王,額)
15	01b	蘇			榦不體宋本作榦		榦	榦	榦	榦	榦	(孫,額)
16	01b	蘘			(毛本の牂蘘に対し)宋本及…作牂蘘		蘘	蘘	蘘	蘘	蘘	(孫,王)
17	01b	黄			(毛本の兔瓜に対し)宋本作兔苽也		兔瓜	兔瓜	兎苽	兎苽	兔瓜	(無)

18	01b	蔞	12		宋本烹作亨		烹	烹	亨	亨	亨	(孫,王,額)
19	01b	菫			宋本曰作説一宋本作曰	C	曰	曰	曰	曰	曰	(孫,王,額),(無)
20	01b	芐	14		禮曰宋本及…作禮記		曰	曰	記	記	記	(孫,王,額)
21	01b	蘜	15		(毛本の似秋華に対し)宋本及…作以秋華		似	似	以	以	以	(孫,王,額)
22	01b	蓍	17		生千歳三百莖宋本作生十歳百莖		千歳三百	千歳三百	十歳百	十歳百	十歳百	(孫,王,額)
23	01b	茲	18		(初印本の茲省聲、通行本の絲省聲に対し)宋本作茲省聲		茲	絲	茲	茲	茲	(額)
24	02a	趬			史記宋本驃騎傳索引に言及していて説文の宋本ではない							
25	02a	趍	32		(毛本の趍趙久也に対し)宋本及…作趨趙久也		趍	趍	趨	趨	趨	(孫,王,額)
26	02a	趙			(毛本の趍趙也に対し)宋本及…作趨趙久也當以毛本爲長		趍	趍	趨	趨	趨	(孫,王,額)
27	02b	迺	36		宋本及…篆體作 ( )…議依宋本							(孫,王)
28	02b	迷	35		宋本惑作或蓋爛文		惑	惑	或	或	或	(孫,王,額)
29	02b	遽			(毛本について)篆體誤宋本作 ( )							(孫)
30	02b	徼			宋本及…作 ( )							(孫,王)
31	02b	逿		32	(毛本の篆體について)此亦脱二畫宋本不脱							(孫)
32	02b	犄	38		(毛本の虎牙也に対し)宋本及…作武牙也		虎	虎	武	武	武	(孫,王,額)
33	02b	躔			(毛本の篆體が厂に従うのに対し)篆體當從广宋本不誤							(孫,王)
34	03a	文 637			宋本無七字(初印本は 637 字、宋本は 630 字)		630	637	630	630	630	(孫,王,額)
35	03a	重 143			宋本三作五(初印本は 143 字、宋本は 145 字)		145	143	145	145	145	(孫,王,額)
36	03a	量	40		(毛本の篆體が壬に従うのに対し)宋本作 ( )從土此从王[33]與佩觿同							(孫,王)
37	03a	羊	41		(毛本の讀若餈に対し)宋本作讀若能		餈	餈	能	能	能	(孫,王,額)
38	03a	譯			(毛本の説解中の譯に対し)宋本説解譯作譯犀作屖		譯…犀	譯…犀	譯…屖	譯…犀	譯…犀	(孫)
39	03a	誠	42		丕能宋本作不能		丕	丕	不	不	不	(孫,王,額)
40	03a	誣	43		釋詁文の宋本のことであり説文の宋本のことではない							
41	03a	詿	44		(毛本の圭或从言佳省聲古賣切に対し)宋本及…作圭聲無或从言佳省五字		圭	圭	圭聲	圭聲	圭聲	(孫,王,額)
42	03a	訇			西域誤宋本作西城		域	域	城	城	域	(孫,王)
43	03a	譽	45		上不譽于凶德宋本及…皆同毛本刓改上字爲爾尚二字蓋依小徐		上	爾尚	上	上	上	(孫,王,額)
44	03a	訓	46		(毛本の太廟に対し)宋本作大廟		太	太	大	大	大	(孫,王,額)
45	03a	譌			宋本譌篆後重出詿誤二篆…毛本皆刪之是		なし	なし	あり	あり	あり	(孫,王,額)
46	03a	讒			宋本篆作 ( )此從二龟誤							(孫)

47	03a	譙	48	44	讀若嚼宋本同一宋本作讀若噍	A	嚼	嚼	嚼	噍	嚼	(孫,額),(王)
48	03a	訛			(毛本の慰也に対し)宋本作尉也誤		慰	慰	尉	尉	慰	(孫,王)
49	03a	讕	50		(毛本の詆讕也に対し)宋本作怚讕也…詆怚皆誤		詆	詆	怚	怚	怚	(孫,王,額)
50	03b	鉏	55		宋本而作亟詩作書		而…詩	而…詩	亟…書	亟…書	亟…書	(孫,王,額)
51	03b	厀	56		(毛本の亦持也に対し)宋本作拖持也誤		亦	亦	拖	拖	拖	(孫,王,額)
52	03b	叉		51	乂[34]形誤宋本作叉形		叉	叉	叉	又	叉	(孫)
53	03b	叡	58	55	(毛本の又取也に対し)宋本作又卑也		取	取	卑	卑	取	(孫,王)
54	03b	卑	59		(毛本の甲聲に対し)宋本聲字空白		聲	聲	( )	( )	聲	(孫,王)
55	03b	壓・壓	60		(通行本の壓に対し)宋本作壓從上此從土恐有一誤							(孫,王,額)
56	03b	毅			毅改之改當從巳宋本不誤(実際には初印本は巳に従うように見える)		改	改	改	改	改	(孫,王)
57	03b	重 5			重五宋本作重四		3	5	4	4	4	(孫,王,額)
58	04a	文 747			文七百四十七宋本作四十八		748	747	748	748	748	(孫,王,額)
59	04a	重 116			重百一十六宋本六作二		112	116	112	112	112	(孫,王,額)
60	04a	瞀	66		(毛本の低目に対し)宋本作氐目		低	低	氐	氐	氐	(孫,王,額)
61	04a	睡	67		(毛本の垂聲に対し)宋本脱聲字		聲	聲	(欠)	(欠)	(欠)	(孫,王,額)
62	04a	皕	68	62	秘宋本作祕[35]		秘	秘	祕	祕	祕	(無)
63	04a	䨻			宋本篆作(　)此從反(　)誤							(孫,王)
64	04a	羖	77		宋本及…作夏羊牡曰羖毛本改牡作牝		牡	牝	牡	牡	牡	(孫,王,額)
65	04a	羌	78		西戎牧羊人也宋本及…皆同毛本刓改牧字作从不可通		牧	从	牧	牧	牧	(孫,王,額)
66	04a	鵠			(毛本の暝鵠也に対し)説文無暝字宋本及…作瞑		暝	暝	瞑	瞑	暝	(孫,王)
67	04a	焉	82	67	羽蟲之長宋本作之属	B	長	長	属	属	長	(孫,王)
68	04b	叡	84		叡深堅意也宋本作叡㩦堅意也毛本於叡深之上刓補叡字		深	深	探	探	探	(孫,王,額)
69	04b	殂	85		(毛本の放勛乃殂落に対し)宋本及…作勛乃殂無放落二字		放…落	放…落	(欠)…(欠)	(欠)…(欠)	(欠)…(欠)	(孫,王,額)
70	04b	殫			據説解贏聲則篆體當作(　)[36]							(孫,王)
71	04b	殫	86		(通行本の贏聲に対し)宋本作从贏[37]一宋本作从贏皆脱聲字	C	从贏	贏聲	从贏	从贏	贏	(無),(孫,王)
72	04b	肊	87		當作匈骨也宋本及…作胷骨也此作胷肉誤		胷骨	胷肉	胷骨	胷骨	胷骨	(孫,王,額)
73	04b	劇			宋本篆作(　)此從二龟誤							(孫,王)
74	04b	桂	90	74	桂义宋本及…作冊又		桂义	桂义	冊又	冊又	冊又	(孫,王)

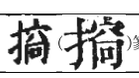
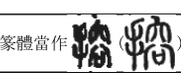
75	05a	筡	91		(毛本の讀若絮に対し)宋本及…作讀若絮		絮	絮	絮	絮	絮	(孫,王,額)
76	05a	畀・卑			(毛本の由聲に対し)當作由聲宋本不誤		由	由	由	由	由	(孫,王)
77	05a	鼛	94		(毛本の弗勝に対し)宋本及…作不勝		弗	弗	不	不	不	(孫,王,額)
78	05a	皿	95		飲食宋本及…飯食小徐…與毛本同		飯	飲	飯	飯	飯	(孫,王,額)
79	05b	亹			覃不體當作覃下放此宋本不誤		覃	覃	覃	覃	覃	(孫,王,額)
80	05b	韎	101		一入曰韎宋本及…皆同毛本刓改入字作又字		入	又	入	入	入	(孫,王,額)
81	05b	磔			𠂤古幸不體宋本作辜		𠂤古幸	𠂤古幸	辜	辜	辜	(孫,王,額)
82	06a	柳	103		櫂椐木也宋本及…皆同説文無櫂字毛本刓改櫂字作檖依小徐也		櫂	檖	櫂	櫂	櫂	(孫,王,額)
83	06a	栩	104		宋本作柔也[38]下文柔栩也轉相訓此作柔也誤…毛本於其字下刓增實字		柔…實	柔…實	柔…(欠)	柔…(欠)	柔…(欠)	(孫,額)
84	06a	樵	105		散木也宋本作散也		散木	散木	散	散	散	(孫,王,額)
85	06a	枚			榦不體宋本作榦		榦	榦	榦			(孫,額)
86	06a	朵	106		(毛本の此與采同意に対し)宋本作此與采同意		采	采	采	采	采	(孫,王,額)
87	06a	材			梃字誤宋本作挺		梃	梃	梃	梃	梃	(無)
88	06a	橦	109	108	(毛本の帳極也に対し)宋本及…作帳柱也一宋本亦作帳極[39]	C	極	極	極	柱	柱	(王,額),(孫)
89	06a	柲		112	攢[40]字誤宋本作欑		欑		欑	欑	欑	(孫,王,額)
90	06a	尿			箋不體宋本作箋		箋	箋	箋	𠂤廿叩隻	箋	(孫)
91	06a	桼	112		東文宋本及…同毛本刓改文字作交		交	交	文	文	文	(孫,王,額)
92	06a	槎	113		宋本作山不槎無木字		木	木	(欠)	(欠)	(欠)	(孫,王,額)
93	06b	叕	117		湯谷宋本及…皆同毛本刓改湯字作暘…山海經天問大招皆作湯谷議依初刻		暘	暘	湯	湯	湯	(孫,王,額)
94	06b	坐			(大徐にない、小徐のみという指摘)							
95	06b	重１			宋本有重一二字此脱		(欠)	(欠)	重一	重一	重一	(孫,王,額)
96	06b	積			多少意未見(毛本の从禾支从只聲に対し)宋本作从禾从只聲脱支字		支	支	从	从	从	(孫,王,額)
97	06b	邰	118		(毛本の詩曰即有邰家室に対し)宋本及…作有邰家室無即字		即	即	(欠)	(欠)	(欠)	(孫,王,額)
98	06b	郿	120		(初印本の郁郿、通行本の郁郿に対し)宋本作存郿説文無郁字…蓋本是存字轉寫加邑耳…小徐作郁郿郁又郁之誤[41]		郁郿	郁郿	存郿	存郿	存郿	(孫,王,額)
99	06b	鄒			宋本篆作鄒此從二𠂤誤							(孫)
100	06b	鄄	121		鄄聲誤宋本及…作堊聲		鄄聲	鄄聲	堊聲	堊聲	堊聲	(孫,王,額)

101	06b	鄤			{⿱十口⿰冖至}聲不成字宋本作臺聲		臺	臺	臺	臺	臺	(孫,王)
102	06b	郵	122		宋本作敲省聲誤…今此云{⿱⿰冖廿邮}省[42]		⿱⿰冖廿邮	⿱⿰冖廿邮	敲	敲	敲	(王)
103	06b	鼯	123		(卿であるべきところ)今此六鄉治之沿宋本之誤也[43]		鄉	鄉	鄉	鄉	鄉	(孫,王,額)
104	07a	暘	124		商書宋本及…作虞書		商	商	虞	虞	虞	(孫,王,額)
105	07a	㫃	126		(『校議』見出し字の㫃に対し)宋本及…古文體皆如此毛本刓改㫃作							(孫,王)
106	07a	旗	127		旗旗衆也宋本及…皆如此毛本依小徐刓去一旗字作旗衆也議依初刻		旗旗衆	旗衆	旗旗衆	旗旗衆	旗旗衆	(孫,王,額)
107	07a	旅	128		旌旗之流也宋本及…皆如此毛本刓改流字作旒說文無旒字流即旒		流	旒	流	流	流	(孫,王,額)
108	07a	游	129		旌旗之流也宋本及…皆如此毛本刓改流字作旒誤		流	旒	流	流	流	(孫,王,額)
109	07a	穅			篆体當作 ( )[44](毛本の康聲に対し)宋本作庚聲		康	康	庚	庚	庚	(孫,王,額)
110	07a	程	131		十程爲分必誤宋本及…作一程爲分		十	十	十	十	一	(孫,王)
111	07a	糳	135		麩也宋本及…皆同毛本刓改麩字麩依今小徐也		麩	麩	麩	麩	麩	(孫,王,額)
112	07b	㝵			音良久校語也…宋本久作又		久	久	又	又	又	(孫,王,額)
113	07b	宕	137		汝南項有宕鄉宋本及…皆同…毛本刓改項有作有項依今小徐也誤		項有	有項	項有	項有	項有	(孫,王,額)
114	07b	覆			覆宋本作覆		覆	覆	覆	覆	覆	(孫,王,額)
115	07b	寘			(毛本の篆体⿱宀夬に対し)宋本篆作寘此從宀誤							(孫,王)
116	07b	疒			皆疒宋本作皆从疒小徐作皆從疒此脱从字		(欠)	(欠)	从	从	从	(孫,王,額)
117	07b	瘨			(毛本の腹脹に対し)說文無脹字宋本作張		脹	脹	張	張	張	(孫,王,額)
118	07b	痕			宋本作从㡿此作从皮誤		皮	皮	㡿	㡿	㡿	(孫,王,額)
119	07b	痙			宋本篆作痓此脱一畫							(孫,王)
120	07b	曰			宋本作讀若艸苺苺脱之字		之	之	(欠)	(欠)	之	(孫,王)
121	07b	寀		152	(毛本の从⿱卜冂に対し)宋本作从卣		卣	卣	卣	卣	卣	(王,額)
122	07b	戟			(毛本の㝃に対し)宋本篆作敱此從犬誤							(孫)
123	07b	錦			宋本及…襄邑織文也此作襄色織文誤		色	色	邑	邑	邑	(孫,王,額)
124	08a	保			…古文采宋本作古文孚		采	采	孚	孚	孚	(孫,王,額)
125	08a	俊	140		才千人也…宋本作材千人也毛本於才字下刓增過字		材千	才過	材千	材千	材千	(孫,王,額)
126	08a	儀	142		歲當作數宋本及…皆作數		歲	歲	數	數	數	(孫,王,額)
127	08a	任	144		(毛本の保也に対し)宋本作符也誤		保	保	符	符	符	(孫,王,額)

128	08a	佻	146	161	(毛本の偷也に対し)説文無偷字宋本及…作愉也		偷	偷	愉	愉	愉	(孫,王,額)
129	08a	伿	147		(毛本の惰也に対し)宋本作隋也誤		惰	惰	隋	隋	隋	(孫,王,額)
130	08a	侉	148	165	(毛本の備詞に対し)宋本及…作惴詞		備	備	惴	備	惴	(孫,額)
131	08a	催	149		(毛本の相擣に対し)宋本作相儔		擣	擣	儔	儔	儔	(孫,王,額)
132	08a	僣	151	167	(毛本の帀也に対し)宋本作市也[45]一宋本亦作帀疑誤	C	帀	帀	帀	帀	市	(孫,王),(額)
133	08a	毖			(毛本の于邮に対し)説文無邮字宋本作卹		邮	邮	卹	卹	邮	(孫,王)
134	08a	複	153		宋本也作皃蓋誤		也	也	皃	皃	皃	(孫,王,額)
135	08a	卒	154	173	(毛本の給事者衣爲卒…に対し)宋本爲卒上無衣字[46]一宋本有	C	衣	衣	衣	衣	(欠)	(孫,王),(額)
136	08a	耇	155	176	(毛本の相逮に対し)宋本作相遠一宋本作相逮按遠誤	C	逮	逮	逮	遠	逮	(孫,額),(王)
137	08b	般	156		(毛本の右騎に対し)宋本及…作車右騑此作騎誤		騎	騎	騑	騑	騑	(孫,王,額)
138	08b	霓	158		止息宋本作比息誤		止	止	比	比	比	(孫,王,額)
139	08b	歙	159		毛本初印作繇繇气出皃刓改作歙歙宋本及…作歙歙		繇繇	歙歙	歙歙	歙歙	歙歙	(孫,王,額)
140	08b	瀫	161		篆體當作 ( )從曰從白誤							(孫,王,額)
141	08b	瀫	161		欲歙也宋本作欲歙歙按下歙乃也之誤飲部歙歙也歙歙也兩通…毛本同		歙	歙	歙歙	歙歙	歙歙	(孫,王,額)
142	08b	鰍・歙			昆于宋本作昆干[47]							(孫,王)
143	08b	歈			(毛本の篆体の歈に対し)宋本篆體作欥誤							(孫,王)
144	09a	頠	163		(毛本の出額也に対し)説文無額字宋本作出頞也		額	額	頞	頞	頞	(孫,王,額)
145	09a	願	164		(毛本の大頭也に対し)宋本作八頑也誤		大頭	大頭	八頑	八頑	八頑	(孫,王,額)
146	09a	類	165		司人也宋本及…皆如此毛本刓改司字伺説文無伺字		司	伺	司	司	司	(孫,王,額)
147	09a	鬖	167		(毛本の墜聲に対し)宋本脱聲字		墜聲	墜聲	差	差	差	(孫,王,額)
148	09a	髯	168	185	(毛本の結也に対し)宋本作髻也説文無髻字一宋本作結[48]	A	結	結	結	髻	髻	(王,額),(孫)
149	09a	鬍	169		从髟从刀易聲宋本及…皆如此…説文無剔字毛本刓改易字作剔云从刀剔聲則篆有二刀矣誤		易	剔	易	易	易	(孫,王,額)
150	09a	餂	172		祝曰厭餂宋本及…皆如此毛本祝字刓改作祀		祝	祀	祝	祝	祝	(孫,王,額)
151	09a	鬼	173		象鬼頭…宋本及…鬼頭下有鬼字		(欠)	(欠)	鬼	鬼	鬼	(孫,王,額)
152	09b	嵽	174		…嵎銕宋本及…作嵎鐵		銕	銕	鐵	鐵	鐵	(孫,王,額)
153	09b	隳			…推落之墮宋本誤作惰		惰…墮	惰…墮	惰…惰	隋…惰	惰…惰	(孫,王,額)
154	09b	庾	175	197	宋本及…作水漕倉也此作槽誤[49]		槽	槽	槽	漕	漕	(王,額)

155	09b	厵			宋本及…作仄也此作反誤		反	反	仄	仄	仄	(孫,王,額)
156	09b	磽	176	204	宋本磬作磐誤一宋本不誤[50]	A	磬	磬	磬	磐	磐	(王,額),(孫)
157	09b	殺	177		(毛本の名豬殺に対し)宋本作名殺豭誤		殺	殺	豭	豭	豭	(孫,王,額)
158	09b	彖			宋本作彖…重出毛本改作彖依小徐也							(孫,王)
159	09b	彖			宋本作希…毛本改作彖亦即希字也皆重出							(孫,王)
160	10a	駰	179		(毛本の馬陰白襍毛也に対し)宋本及…作馬陰白襍毛黑		也	也	黒	黒	黒	(孫,王,額)
161	10a	驕			(毛本の我馬唯維に対し)宋本及…作我馬唯驕		維	維	唯	唯	維	(孫,王)
162	10a	敺	180		(毛本では从支に対し)宋本作从支按支誤		支	支	攴	攴	攴	(孫,王,額)
163	10a	駗	181		馬載重難也宋本及…皆如此毛本於重難下刓增行字…按重難聯文議依初刻		(欠)	行	(欠)	(欠)	(欠)	(孫,王,額)
164	10a	麎	183	214	宋本作麎牡者此作牝誤		牝	牝	牝	牡	牡	(王,額)
165	10a	𠂤			籀文一宋本作篆文		籀	籀	篆	篆	籀	(額),(孫,王)
166	10a	麤			二[51]誤宋本作三此無所闕或舊本闕反切		三	三	三	三	三	(孫,王,額)
167	10a	猲	185	215	相駕…宋本作相驚不體一宋本不誤	C	駕	驚	驚	駕	駕	(孫),(王,額)
168	10a	𩰫			(𩰫)宋本篆体作(𩰫)此脱一畫							(孫,王)
169	10a	𩰫			盛古文悖字[52]宋本作盛籀文悖字按此校語也悖乃誖之誤言部(の盛で)云籀文角部(の𩰫で)校語言古文其岐出如此		籀	籀	籀	籀	籀	(孫,王,額)
170	10a	熇			熱不體宋本作熱		熱	熱	熱	熱	熱	(孫,王)
171	10a	烓	188	225	宋本作讀若同口迴切此作回誤		回口迴	回口迴	同口迴	阿口迴	同口迴	(孫,額)
172	10a	炫	191		(毛本の爛燿也に対し)宋本作燿燿也		爛	爛	燿	燿	燿	(孫,王,額)
173	10a	𩦎	193	228	宋本作讀若飴鎧…曰兊旦不體	B			豈		豈	(孫,額)
174	10a	𩠐	194	232	(毛本の施罟灑灑に対し)説文無灑字宋本作施罟灑灑[53]一宋本及…施罟洒洒	A	灑灑	灑灑	洒洒	灑灑	洒洒	(無),(孫,額)
175	10b	亦			亦 當皆作亦宋本不誤		亦	亦	亦	亦	亦	(孫,王,額)
176	10b	喬	195		(毛本の高省に対し)宋本作高省聲一宋本脱聲字[54]	C	(欠)	(欠)	(欠)	(欠)	(欠)	(無),(孫,王,額)
177	10b	尪	196		尪尪行不正宋本及…皆如此毛本刓改作尫尪		尪	尫	尪	尪	尪	(孫,王,額)
178	10b	圉	197		圉圄宋本及…皆如此毛本圄字刓改作圉		圄	圉	圄	圄	圄	(孫,王,額)
179	10b	皋			皷隷俗宋本及…作鼓		皷	皷	鼓	鼓	鼓	(孫,王,額)

180	10b	㝵	198		宋本及…作㝵湯舟此依小徐作盪		盪	盪	湯	湯	湯	(孫,王,額)
181	10b	臭[55]	199		宋本篆作 ( )此脱一筆							(孫,王,額)
182	10b	蹲	x01		(毛本の春秋國語曰に対し)宋本作春秋傳曰今無此宋本未敢信之[56]		國語	國語	國語	傳	國語	(孫,額)
183	10b	蜀			…宋本篆體作							(孫,王)
184	10b	悃	200		宋本及…篆作悃…無悃議改復							(孫,王,額)
185	10b	悃	200		(毛本の困聲に対し)宋本及…説解作困聲		困	困	困	困	困	(孫,王,額)
186	10b	怒	201	244	今此及宋本作朝飢		朝飢	朝飢	朝飢	朝飢	朝飢	(孫,王,額)
187	10b	怛	202	245	驕字衆本如此一宋本作矯誤[57]	A	驕	驕	驕	矯	矯	(孫),(王,額)
188	10b	忻			(毛本の旅瑣瑣に対し)宋本作旅瑣瑣		瑣瑣	瑣瑣	瑣瑣	瑣瑣	瑣瑣	(孫,王,額)
189	11a	重 63			宋本三作二按當作四		62	63	62	62	63	(孫,王)
190	11a	滅			(毛本の篆體滅に対し)宋本作□氵□或火誤							(孫,王)
191	11a	滻			(通行本の入灞に対し)説文無灞字宋本作霸		霸	灞	霸	霸	灞	(孫,王)
192	11a	淯	204	250	(毛本の入沔に対し)宋本作入海誤		沔	沔	海	海	海	(孫,王,額)
193	11a	潭			宋本及…作玉山…此作王山誤		王山東入	王山東入	玉山東入	王山東	王山東入	(孫)
194	11a	濩	207		宋本作寠聲此作雟聲誤毛本作□彳□帚又又寢之譌		獨文侵	獨文侵	寠…寢	寠…寢	寠…寢	(孫,王,額)
195	11a	洨			宋本汦作泜此誤		汦	汦	泜	泜	泜	(孫,王,額)
196	11a	沛・沛			宋本汙作汗		汗	汗	汗	汗	汗	(孫)
197	11a	灋			舘俗字宋本作館		舘	舘	館	館	館	(孫,王,額)
198	11a	洇	209		(初印本の篆体洇に対し)宋本及…皆如此此毛本刓改篆作涸							(孫,王,額)
199	11a	洇	209		此毛本…又刓改説解作困聲…議從初刻		因	困	因	因	因	(孫,王,額)
200	11a	澥	210		郭澥海之別也宋本及…皆如此毛本刓改作勃澥海之別也		郭…別	勃…別名	郭…別	郭…別	郭…別名	(孫,王)
201	11a	濱	211	257	濱濱也衆本如此一宋本作湧濱也誤毛本也字刓改作然	A	濱濱也	濱濱然	濱濱也	湧濱也	濱濱也	(孫,額),(王)
202	11a	滹	212		滹沱北流宋本及…如此毛本初刻本作滹沱刓改作滹池説文無池字		滹池	滹池	滹沱	滹沱	滹沱	(孫,王,額)
203	11a	濫	213		畢沸宋本作𩰫沸[58]		畢	畢		𩰫		(孫,額)

204	11a	洌			井洌寒泉宋本及…如此…毛本於寒泉下刓補食字一宋本及…又有食字	C	泉	泉	泉	泉	泉	(孫,王,額),(無)
205	11a	沙			从辵誤宋本作从尜		辵	辵	尜	辵	辵	(孫)
206	11a	洫	215		宋本及…乎作于		乎	乎	于	于	于	(孫,王,額)
207	11a	潢	216	264	(毛本の小津に対し)宋本作水津也一宋本作小津	C	小	小	小	水	水	(王,額),(孫)
208	11a	沿	217	266	主當作王宋本不誤[59]	B	主	主	王	主	王	(孫,額)
209	11a	溺	218		雲气起山毛本刓改山字作也宋本及…作也		山	也	也	也	也	(孫,王,額)
210	11a	濩	219		(毛本の雨流霤下皃に対し)宋本脱皃字		皃	皃	(欠)	(欠)	(欠)	(孫,王,額)
211	11a	溓			氷當作仌 宋本作薄水也一曰		氷	氷	水	水	水	(孫,王,額)
212	11a	瀚			宋本作 ()此從卤誤							(孫,王,額)
213	11a	浚	221		(通行本の浸沃也に対し)宋本作浸渶也		渶	沃	渶	渶	渶	(孫,王,額)
214	11a	澆	221		(通行本の沃也に対し)宋本作渶也		渶	沃	渶	渶	渶	(孫,王,額)
215	11a	液	222		(毛本の盡潤也に対し)當作盡潤也宋本作盡也		盡	盡	盡	盡	盡	(孫,王,額)
216	11a	洗	224		宋本及…作洒足…此作灑誤		灑	灑	洒	洒	洒	(孫,王,額)
217	11b	文 465			宋本五作八今實四百六十四		465	465	468	468	468	(孫,王,額)
218	11b	皭	225		(初印本の最初にある)古字宋本空白…一宋本不空白[60]	C	古	古	古	古	( )	(額),(孫,王)
219	11b	霖	226		南陽謂霖霖宋本及…皆如此毛本於謂霖之下刓補雨曰二字議依初刻		(欠)	雨曰	(欠)	(欠)	(欠)	(孫,王,額)
220	11b	鯽	228		(毛本の鮸鯽に対し)説文無鮸字宋本及…作烏鯽		鮸	鮸	烏	烏	烏	(孫,王,額)
221	11b	龕	229		篆體從合説解作合聲宋本及…皆如此毛本刓改篆作□含龍又刓改合聲作含聲無所據也							(孫,王,額)
222	12a	耿	231		从耳烓省聲宋本及…皆如此毛本刓改烓字作炯…議依初刻…		烓	炯	烓	烓	烓	(孫,王,額)
223	12a	耿	231		小徐韻會引作從火聖省聲杜説宋本作杜林[61]…大徐改竄卽難通		杜林	杜林	杜林	杜林	杜林	(孫,王,額)
224	12a	麿	232		乘輿金馬耳也宋本及…皆如此毛本刓補飾字於馬耳之上		(欠)	飾	(欠)	(欠)	(欠)	(孫,王,額)
225	12a	揖	233		攘也宋本及…皆如此毛本刓改攘字作讓		攘	讓	攘	攘	攘	(孫,王,額)
226	12a	扶	234		左也宋本及…皆如此毛本刓改左字作佐		左	佐	左	左	左	(孫,王,額)
227	12a	搦			 ()篆體當作  ()宋本不誤							(孫)
228	12a	搗	237		一曰手指也宋本及…皆如此毛本刓補作手指搗也依小徐		(欠)	搗	(欠)	(欠)	(欠)	(孫,王,額)
229	12a	球			(毛本宋本の捄之隩隩に対し)…詩考引作捄之仍仍…今檢宋本無作仍仍者未知其審		隩	隩	隩	隩	隩	(孫,王,額)
230	12a	撻			罰不體宋本作罰		罰	罰	罰	罰	罰	(孫,王,額)
231	12a	扰	239	305	…告言宋本同一宋本無告字	C	若告/言	若告/言	若告/言	若/言	若/言	(孫),(王,額)

232	12a	揙	240		(毛本の□扌專也に対し)宋本作撫也		□扌專	□扌專	撫	撫	撫	(孫,王,額)
233	12b	嬈	243		…宋本及小徐嬈篆後有變籀文嬈…重出毛本刪去籀文是		(欠)	(欠)				(孫,王,額)
234	12b	嫢	244		(毛本の細腰爲嫢に対し)宋本作細爲嫢無腰字小徐作細要爲嫢方言…広雅…皆不言要議依宋本		腰	腰	(欠)	(欠)	(欠)	(孫,王,額)
235	12b	孎	245		讀若人不孫爲孎宋本及…皆如此毛本刓改作爲不孎		(欠)	不	(欠)	(欠)	(欠)	(孫,王,額)
236	12b	嫇			宋本説解中嫇冤字皆從冂此從宀誤		□女寃…寃	□女寃…寃	嫇…寃	寃…娩	□女寃…寃	(孫)
237	12b	嫥	246		一曰嫥嫥宋本及…皆如此毛本刓補女字於嫥嫥之上		(欠)	女	(欠)	(欠)	(欠)	(孫,王,額)
238	12b	媛	247	313	(毛本の爰引也に対し)宋本作爰於也[62]一宋本亦作爰引也	C	引	引	引	於	於	(王,額),(孫)
239	12b	嬰			(毛本の媕嬰也に対し)宋本作陰嬰也		媕	媕	陰	陰	陰	(孫,王,額)
240	12b	氏	251		…氏崩聞數百里宋本亦如此毛本於崩聞之窮刓補聲字		(欠)	聲	(欠)	(欠)	(欠)	(孫,王,額)
241	12b	乚			宋本作从反亅此作乚誤		乚	乚	亅	丨	乚	(孫)
242	12b	弦・弦			□糸系俗字宋本作絲		□糸系	□糸系	絲	絲	絲	(孫,王,額)
243	13a	文 700			(通行本の 700 に対し)宋本作六百九十九今毛本實七百三		699	700	699	699	699	(孫,王,額)
244	13a	重 124			(通行本が 124 に対し)宋本四作三今實一百二十補刻蛑□阝鹵二字則重百二十二		123	124	123	123	123	(孫,王,額)
245	13a	糸			□糸系俗字宋本作絲後放此		□糸系	□糸系	絲	絲	絲	(孫,王,額)
246	13a	級			第字宋本同一宋本作弟	C	第	第	弟	弟	第	(額),(孫,王)
247	13a	綰	258		(毛本の一曰絹也に対し)宋本作一曰綃也誤		絹	絹	綃	綃	綃	(孫,王,額)
248	13a	杸			(毛本の杸に対し)宋本作□木彳							(孫)
249	13a	綮			宋本及…作一曰敝絮此作一曰敝綮誤		綮	綮	絮	綮	綮	(孫)
250	13a	蠖			(蠖)宋本作(蠖)[63]							(孫,王)
251	13a	螟	259		从虫从冥冥亦聲宋本亦如此毛本刓改作从虫冥聲又螟蛉		从冥冥亦聲	冥聲又螟蛉	从冥冥亦聲	从冥冥亦聲	从冥冥亦聲	(孫,王,額)
252	13a	蛢			宋本亦作蟥此蝗誤		蝗	蝗	蟥	蟥	蟥	(孫,王,額)
253	13a	蠪	260		蛄蠪強羋也宋本及…皆如此毛本刓改作姑蠪強蛖也		蛄…羋	姑…蛖	蛄…羋	蛄…羋	蛄…蛖	(孫)
254	13a	蜡			骴不體宋本作骴		骴	骴	骴	骴	骴	(孫)
255	13a	蟼			(蟼)篆體誤宋本作(蟼)							(孫,額)
256	13a	蟼	261		蠡宋本作螽		螽	蠡	螽	螽	螽	(孫,王,額)
257	13a	螫	262		蟲虫行毒也毛本初刻如此後依宋本刓去虫字後又補刻虫字[64]		(欠)	虫	(欠)	(欠)	(欠)	(孫,王,額)
258	13a	蝁	263		(毛本の虺屬に対し)宋本作蚁也		虺屬	虺屬	蚁也	蚁也	蚁也	(孫,王,額)

259	13a	蛅			从爿聲毛本刓去从字空白宋本無[65]		（ ）	（ ）	（欠）	（欠）	（欠）	(孫,王,額)
260	13b	颲			宋本及…烈風也此云列風也誤		列	列	烈	烈	烈	(孫,王,額)
261	13b	二	269		从偶宋本及…皆如此毛本刓補作从偶一…議依初刻		（欠）	一	（欠）	（欠）	（欠）	(孫,王,額)
262	13b	恆			上下心以舟施宋本及…皆如此毛本於心字上刓增一字		一	一	（欠）	（欠）	（欠）	(孫,王,額)
263	13b	土	270		地之吐生物者也二象地之下地之中物出形也宋本及…皆如此毛本於吐生下刓補萬字之中下刓補丨字		（欠）⋮（欠）	萬⋮丨	（欠）⋮（欠）	（欠）⋮（欠）	（欠）⋮（欠）	(孫,王,額)
264	13b	圛		347	(毛本の鉉堊に対し)説文無鉉字宋本作緜		鉉	鉉	緜	鉉	鉉	(孫)
265	13b	重 26			宋本亦如此		26	26	26	26	26	(孫,王,額)
266	13b	畬	275		不菑畬田宋本及…皆如此毛本刓去畬下之田空白		田	（ ）	田	田	田	(孫,王,額)
267	13b	勞	278	351	熒火燒門…宋本及…作燒冂毛本刓改門字作冂按熒從焱冂議依改刻		門	冂	冂	冂	門	(孫,王)
268	14a	鈃	281		似鐘宋本及…似鍾		鐘	鐘	鍾	鍾	鍾	(孫,王,額)
269	14a	鉊			(毛本で大鎌也に対し)宋本作大鐵也		鎌	鎌	鐵	鐵	鐵	(孫,王,額)
270	14a	鍰	283	355	宋本作罰書曰列百鍰毛本依今小徐作虞書曰皆誤也		虞書曰	虞書曰	罰書曰	罰書口	罰書曰	(孫,額)
271	14a	尻	286		宋本及…作閒居此作閑居		閑	閑	閒	間	閒	(孫,王,額)
272	14a	輦	287	364	宋本作轂耑沓也一宋本亦作端非	C	端	端	端	耑	耑	(王,額),(孫)
273	14a	棗			登俗𦍒字非此義宋本作登		登	登	登	登	登	(孫,王,額)
274	14a	軋			宋本作報也(毛本の輾也に対し)説文無輾字		輾	輾	報	輾	報	(孫,額)
275	14a	報			(通行本の篆體は戾に従い戾聲にするところ)宋本同一宋本篆作□車□卩叉説解作戾聲	C	報	報	報	輔	報	(孫,王)
276	14a	報			…一本篆與説解皆從戾	C	皮	戾	戾	戾	戾	(孫,王),(額)
277	14a	輕			(毛本の車戾也に対し)宋本及…作車戾也誤		戾	戾	戾	戾	戾	(孫,王,額)
278	14b	陈	291		天依阪宋本亦如此毛本刓改依字作陈		依	陈	依	依	依	(孫,王,額)
279	14b	阿			(毛本の篆體 に対し)宋本作							(孫,王)
280	14b	韓			(毛本の篆體 ( )に対し)宋本作 ( )此誤							(孫)
281	14b	鬱	292		…宋本作嗌字此作隘又嗌之誤		隘	隘	嗌	嗌	嗌	(孫,王,額)
282	14b	甲	295		東方之孟宋本及…皆如此毛本於東方上刓補位字		（欠）	位	（欠）	（欠）	（欠）	(孫,王,額)
283	14b	侖	296		(通行本の始於一見於十に対し)宋本及…作始於十見於千		千	十	千	千	千	(孫,王,額)
284	14b	醹			宋本作惟毛本…作維		維	維	惟	惟	維	(孫,王)
285	14b	醽			( )宋本篆作 ( )							(孫,王)
286	15a	鄙夫			宋本作畺夫…此依小徐作鄙夫		鄙	鄙	畺	畺	畺	(孫,王,額)
287	15a	於其			(毛本の於其に対し)宋本及…其於		於其	於其	其於	其於	其於	(孫,王,額)
288	15a	只(部 49) 卣(部 50)	308		(毛本は只・卣の順であるのに対し)宋本先卣後只		只・卣	只・卣	卣・只	卣・只	卣・只	(孫,王,額)
289	15a	皕	309	380	宋本皕作百誤							(孫,王)

290	15a	鼓			宋本及…作鼓從叟此從叟誤							(孫,王)
291	15a	臥			卧身月衣衷老毛毳尸尺尾…不符宋本卷首新目及八上八下次第皆如舊目毛本卷首新目改從小徐部叙篇		整合せず	整合せず	整合する	整合する	整合する	(孫,王,額)
292	15b	同條牽属	310		(毛本の同條牽属に対し)宋本作同牽條属		條 牽	條 牽	牽 條	牽 條	牽 條	(孫,王,額)
293	15b	據形聯系	311		(毛本の據形聯系に対し)宋本作據形系聯		聯 系	聯 系	系 聯	系 聯	系 聯	(孫,王,額)
294	15b	艸莽			(毛本の艸莽に対し)宋本作莽		莽	莽	莽	莽	莽	(孫,王,額)
295	15b	校書東觀	314		(毛本の校書東觀に対し)宋本作校東觀脱書字		書	書	(欠)	(欠)	(欠)	(孫,王,額)
296	15b	古文孝經者	315		(毛本の古文孝經者に対し)宋本作文古孝經者誤到		古 文	古 文	文 古	文 古	文 古	(孫,王,額)
297	15b	死辠死辠	316		宋本死辠下有臣字(毛本は臣字はない)		(欠)	(欠)	臣	辠	臣	(孫,王,額)

さて、孫・王本と符合する箇所(B-A)を数えると、僅か7箇所ではあるけれども、孫本より王本のほうが四次様本と符合する箇所が多い。この傾向は、阮元らの汲古閣本の底本を王本とする従来説を支持するように見える。しかし、どちらとも異なる箇所(FまたはG)がずっと多いことを考えると、この程度の差から底本をどちらかから選ぶのは困難であろう。

3.2 『説文訂』指摘済部分について

『説文訂』『校議』で重なりがある指摘箇所は171箇所であった。『説文訂』は255箇所で明示的に「宋本」を引くので、1/3程度が除外されていることになる。表2には複数の宋本の違いの記録について、

A) ある見出し字について『説文訂』『校議』とも、複数の宋本の違いを記す。

B) ある見出し字について『説文訂』は複数の宋本の違いを記すのに対し、『校議』は一種類しか記さない。

C) ある見出し字について『説文訂』は一種類しか記さないのに対し、『校議』は複数の宋本の違いを記す。

D) ある見出し字について『説文訂』は(宋本以外も含め)何も記さないのに対し、『校議』は複数の宋本の違いを記す。

の種別を書き込んでいる。『説文訂』『校議』に重なりがあるものはA,B,Cに、『校議』独自のものはDに含まれる。それぞれを数えると、Aが6項、Bが3項、Cが12項、Dが6項となる。『説文訂』が王本・周氏宋本の差を明示的に記す箇所は9項ある。これらは全て『校議』でも言及され、A,Bに含まれている。ここで、もし『校議』が『説文訂』を機械的に引き写したのであればAが9項になる筈だが、そうはなっていない。さらに、Cが12項あることから、『校議』は自ら宋本を引き直して確認したものが書かれていると考えるのが妥当であろう。たとえば項182では、『説文訂』は「宋本作春秋傳曰…」と書くけれども、厳可均はそれに符合する宋本を見ることができなかったらしく「今無宋此宋本未敢信之」という文言が見える。

それでは、『校議』が参照した「宋本」と孫・王本はどの程度似ているだろうか。表2に示した各項での状況を数え上げると、表3のようになる。調査したうち、もともと小字本間に差がないものが6割を超える。小字本間に差があり、かつ、そのうち一つとだけ符合するのは1割に満たない。そのため、統計的に有意とは言い難いけれども、孫本でも説明できるものが上位を占めること、孫本のみと符合する項(29項)が王本のみ(4項)・額本のみ(7項)と符合する項より多い、という2点は言える。このことから、周祖謨の「『校議』が参照した資料は孫本に似ている」という指摘は支持されると言ってよいだろう。また、小字本のどれでも説明できないものが4項ある(項2, 17, 62, 87[28])ことから、『校議』が言う「宋本」は我々が現在見る孫本とは異なるということも言える。

3.3 小篆字形について

本稿の興味の一つに、厳可均が見た「宋本」に、孫本特有の小篆字形が見えるかという点があった。孫本の小篆は顧広圻の校訂があるとされ、孫

表 3:『校議』が記す状況と、孫・王・額本の符合の状況

表 2「『校議』に符合するもの」の中で、小字本の組み合わせが出現する回数。たとえば王本とも符合する宋本は 182+57+12+4 回出現するけれども、王本としか符合しないような宋本の状況は 4 回しか出現しない。

記述された状況を説明可能な版本のセット	出現回数	版本差がある場合に限ったの割合
(孫,王,額)	182	(除外)
(孫,王)	57	0.44
(孫)	29	0.22
(孫,額)	16	0.12
(王,額)	12	0.09
(無)	9	0.07
(額)	7	0.05
(王)	4	0.03
合計	316	

本特有の小篆字形は宋本と異なるのではないか、という懸念がある。

『校議』は小篆字形に関して40箇所で指摘する。そのうち『校議』が引く「宋本」の小篆字形が孫本とのみ符合する例は、項29, 31[29], 46, 99, 122, 227, 248, 280の8個ある一方、孫本と符合しない字形は1つも記されていない。従って「孫・王・額本を比較した場合の、孫本特有の字形」は、『校議』が引く宋本にもあったと考えて良いであろう。

また『校議』が指摘する範囲での額本の小篆字形にも興味深い傾向が見える。表 2のうち額本の小篆だけが異なるものを探すと、項10, 27, 30, 33, 63, 70, 73, 99, 105, 115, 119, 143, 158, 168, 183, 190, 250, 275, 279, 285の20個と、かなり多い。これらの額本の小篆字形は全て汲古閣本と一致するのである[30]。これも周祖謨の「鮑本則介於毛本王本之間」を支持する結果と言えるだろう。前稿では、額本だけが異なる場合、孫・王本が誤っていて、額本が正しい状況が見えることを指摘した。上記の結果から、その起源について汲古閣本の影響が推測される。

3.4 複数の「宋本」について

さて、『校議』が引く「宋本」の一つが孫本に似ているとして、その他の「宋本」をどう考えるかが問題となる。王本と符合する項数(合計255項)、額本と符合する項数(合計217項)を単純に比較すれば王本のほうが多い。一方、孫本に符合する項を全て除外して考えると、王本と符合する項は16項、額本と符合する項が19項と逆転する。しかし、どれとも符合しない項が4項あることを考えると、この程度の差から王本と額本のどちらに似ているか評価するのは難しい。

前稿では、先行研究に従って小字本を比較したところ、少なくとも373項で異なりが見られた。単純に考えると、『校議』が王本に類似した資料、孫本に類似した資料をそれぞれ1つずつ以上見ていたのであれば、かなり多くの差異が記される筈である。しかし、今回得た結果では『校議』が複数宋本間の差異を記すのは24箇所と非常に少ない。すると、『校議』が参照した資料は、複数ではあるけれども、全体として孫本に近く、十数か所でだけ王本や額本に近いようなものだったと考えるべきだろうか。

これについて、立ち戻って考えると、実は『説文訂』も王本と周氏宋本の差を大量に記しているわけではなかったことが想起される。『説文訂』は、段玉裁が考える「許慎原本ではこうであった」姿と汲古閣通行本の差異を整理したものであって、初印本や宋本の状況を全て書き出したものではない。「大徐の失を正す」ことを目的とした『校議』も、宋本間の差を全て書き出す意図は持っていなかったのではないだろうか。たとえば、『校

議』は確かに差異を見ているけれども、それを論評しない例として、表2の項171がある。ここでは、汲古閣本(四次様本・通行本のどちらも)に読若回、口迴切とあるところを、「宋本」は「読若同、口迴切」とする、という指摘である。読若字について「此作回誤」とは言うものの、反切用字の違いには言及がない。前稿で調査した383項のうち114項は反切用字の異なりである[31]。一方、『校議』で今回調査した箇所の中で、反切用字について記している箇所は一つもない(『説文訂』も同様の傾向を持つ[32])。『校議』も、『説文訂』と同様に汲古閣本で問題がないものは特に指摘しない、またさらに反切は校勘の対象外とする方針をとった可能性が考えられる。

4 結論

4.1 結果のまとめ

本稿では、『校議』が「宋本」をひく297箇所の状況を、『説文訂』、汲古閣四次様本および通行本、また、孫・王・額本と比較した。その結果、以下のことがわかった。

- 汲古閣初印本と宋本の関係について
  『校議』の引く「初印本」は、実際には初印本を参照してない可能性がある。本稿では淮南書局が翻刻した四次様本と比較した。
  - 四次様本が王・孫・額本のどれとも符合しないものは138箇所あった。四次様本・通行本の差は少なくとも253箇所以上あるので、五次修訂が最大という従来の評価は維持されるけれども、四次様本と現存する宋刊小字本の参照関係を単純に判断するのは難しい。
  - 四次様本が孫本と一致する箇所は91箇所であるのに対し、王本が一致するのは98箇所、額本が一致する箇所は131箇所であった。汲古閣本は孫本よりも王本に似るという従来の評価は維持される。しかし、「四次様本がどの小字本とも符合しない」箇所はこの2倍近くあるため、これだけでは汲古閣本の底本を判断する根拠とはし難い。
- 『校議』の「宋本」と清刊本について
  - 『校議』が宋本に言及する箇所で、小字本間に差がある134箇所のうち、孫本と符合するものは102箇所ある。周祖謨の「即孫氏所據之本」の評価は妥当である。また、4箇所で孫本と異なるため、孫本そのものを「宋本」としているわけではない。
  - 『校議』は複数の宋本を参照している。しかし違いを記録している箇所は24箇所と少ないため、「孫本に似るもの」の他に、王本あるいは額本に似たものがあったかは判断し難い。
  - 『校議』が汲古閣本と宋本の小篆の差を記す範囲では、20箇所で汲古閣本は孫・王本と異なり、額本とのみ符合する。周祖謨の「鮑本即介於毛本王本之間」という評価は支持される。

4.2 今後の課題

本稿で未解決の課題として、まず、四次様本が宋刊小字本と異なる理由の検討がある。未発見の宋刊小字本が底本であった可能性も排除できないけれども、趙氏写本や説文解字五音韻譜といった毛扆が参照できた資料との類似性を先に検討すべきであろう。

本稿では『校議』に見える「宋本」と孫本の関係に注目した。そのため、『説文訂』が宋本について記すのに『校議』が記さない状況については、その背景が十分に明らかにできていない。結果として、前稿で調査した孫・王・額本の違いが『校議』に見えないことの理由ははっきりしていない。『校議』の編纂方針を明らかにするには、『説文訂』が言及する一方『校議』が言及しない箇所など、「『校議』が採らなかった情報」がどういうものであったか、調査が必要である。『校議』が宋本の情報を落とした基準が明らかになれば、『校議』が宋本をひく基準(たとえば汲古閣本と一致するために書かないのか、汲古閣本と異なっても校勘対象としていないのか)をより理解できると思われる。

謝辞

本稿は科研費課題番号263303770Bと16K0046

00Aの補助を受けました。本稿執筆にあたり、東京大学大西克也教授、上智大学高橋由利子名誉教授には様々な助言をいただきました。ここに御礼申し上げます。

注

1 巻末の毛扆の序文には順治癸巳(1653)の年記があり、汲古閣本が1653年に出たとする文献もある。しかし、この年では毛晋が存命中で毛扆も14歳であることから、康熙癸巳(1713)の誤りとするのが定説である。

2 続修四庫全書をスキャンしたデータがhttps://archive.org/details/02076513.cn で閲覧でき、簡易ではあるけれども、巻01下の葉8,9が『易經揆一』の巻5とさしかわっており、また最後の後序の葉のスキャンに異常が見られるため注意されたい。

3 陳昌治本の中華書局影印[1]は実際の陳昌治本を修正しているという指摘があり[6]、こんにちでは陳昌治本の中華書局影印本が最も広く用いられるというべきかもしれない。

4 王昶・陸心源旧蔵、現静嘉堂文庫所蔵。日本では岩崎本、静嘉堂本などと呼ばれることが多いけれども、ここでは周祖謨に従う。

5 これらの版本評価に関する既存の議論に関しては前稿[13]を参照されたい。

6 海源閣本には額勒布の印記があることから、額本の底本と見られてきた。王貴元氏は両者に違いがあること、底本を所持していたとされる鮑漱芳の印記は見えないことから、海源閣本は額本の底本では無いと考える。ただし、これは額本が底本の誤りも含めて出版したものであれば、という前提を含むように思われる。

7 ただし、孫星衍による王本の写本が存在するのに[20]、王本には孫星衍の印記がないことを考えると、印記が無いからと言って孫星衍は海源閣本を見たことが無いと断定はできない。

8 倉田氏は内藤残本と王本には小篆の違いも多いと記すけれども、具体的な差は何も示されていない。

9 日照丁氏本の識語でも、海源閣本には誤字や摩滅した部分が頗る多く、また孫本との違いも見られると書かれている。しかし、その日照丁氏本も、底本のどこが破損していたのかわからない程度に補正されてしまっている。翻刻に際して底本の誤りを正す意識がどの程度あったかは今判断を保留したい。

10 これに関して、平津館本抱朴子にも同じような経緯があったことが下見隆雄氏によって明らかにされており[24]、大変興味深い。

11 『校議』は校勘を加える部分のみ書き出したものであるのに対し、『校録』、『斠詮』は汲古閣通行本を基盤として異同がないものも全て含めている。ただし、「宋本」に関する言及箇所には大きな差があり、『校録』での言及は数百か所を越える一方[27]、『斠詮』は筆者の予備的な調査では30箇所程度の言及であった。また、『斠詮』は小篆見出し字が全て行頭に来るように改行する体裁であり、一篆一行本の考え方の先駆的な試みをしていたと言える。

12 指摘される誤り全46箇所のうち、王本・額本ではなく孫本でないと説明できないもの26箇所、孫本でも王本でも説明できるもの17箇所、説明できないもの3箇所であった。

13 実際に見たものが宋本そのものでなく、孫星衍による景宋写本のような資料の可能性もある。

14 孫・王・額本および海源閣本は全て1頁10行の形式であるのに対し、汲古閣本は1頁7行の形式である。説文の版本に関して、前者を小字本、後者を大字本と呼ぶことが多い。

15 この他、王本、周氏宋本、葉石君景宋写本などが参照されている。しかし、それらに関しては『説文訂』は汲古閣本との関係は議論しない。また、「考毛氏所得小字本与今所見三小字本略同」と書く所から判断すると、段氏は王本を底本とは考えていないように思われる。

16 現存するのは残巻である。しかし、『説文訂』では趙氏写本が1箇所も参照されない巻号は無く、その時点では完本であったと思われる。

17 趙氏写本は巻12下の弓部の途中から巻末まで書写がなく(底本での脱落と思われる)、他の宋刊本によって補わなければ四次様本の内容にはならない。仮に宋刊小字本と趙氏写本のテキストの違いも意識した語であるならば、これを見たうえで「趙氏写本を翻刻したものが四次様本である」と判断するとは考え難い。

18 理由の一つとして孫星衍による商訂に2年を要したことが後序に書かれているけれども、さらに自らも修正していたことが書かれている。

19 この他に、『校議』には「依議初刻」のような語が見え、「帝」字の校語のように、一つの項目の中で「初印」「初刻」両方の語が見える場合もあるけれども、初刻本と初印本の違いを挙げている箇所は見えなかった。

20 この2つの他にも、袁廷檮所蔵本、顧之逵所蔵本が当時存在したと思われ、さらに、現存するものに台湾国家図書館所蔵の莫棠跋残本、京都大学所蔵の四次修改8冊本なども知られる。

21 淮南書局本でも「上飾」であるけれども、厳章福が書いたのは蔣維培所蔵本の状況であることには注意しなければならない。

22 王本も実際にそうなっている。

23 両方を指すなら初印本は「佩刀上飾」、通行本のみを指すなら初印本は「佩刀下飾」となる。

24 顧氏はこれ以前に袁廷梼旧蔵本を入手しており、複数の未改本を見ていたことになるけれども、それでも四次様本を初印本と呼んでいる。

25 正文数・重文数などに散見される。また、数は少ないけれども、「初印本」の状況を書いたと思われる部分が、淮南書局本・汲古閣通行本・孫本・王本・額本とも符合しない状況もある(たとえば表2の項166、項169、項259など)。高橋氏は汲古閣通行本にも複数の版があった可能性を指摘しているが[35]、その指摘ともまた異なる差異に見える。

26 ただし、全ての箇所で改訂が進むほど宋本から離れて通行本に近づくという不可逆的な変化をしたと仮定するのは単純すぎるかもしれない。

27 項24(趭)、項40(䢼)がこれにあたり、説文の宋本を引かないけれども、項40に関しては『説文訂』で言及があるので、前者だけをこれに数える。

28 ただし、項17に関しては表記揺れ、項62は誤読の可能性がある。王・額本に符合するが孫本に符合しない項はこの他、項23, 102, 121, 154, 164がある。

29 この項「㴑」については、孫本と海源閣本で小篆字形が異なることを前稿で報告した。

30 大半で四次様本と通行本の間で小篆に違いがない。例外的に項105は違いがあり、額本は通行本に符合する。

31 大半は周祖謨の孫本校勘に由来する。鈕樹玉の「説文刊誤」および、倉田の内藤旧蔵残本調査にも見える。

32 ただし、汲古閣本は複数の読みを持つことになっているけれども宋本ではそうなっていない、といった違いは記される。

33 広文書局本では「王」ではなく「壬」に彫っている。

34「乂」ではなく「叉」であるべきだが、広文書局版でも「乂」であった。

35 孫・王・額本とも実際には示偏を「ネ」に作ったものである。同様の誤読は前稿で整理した先行研究にもみえる。

36 この「當作」に相当する字形について宋本を引かない。従って額本のような状況は見ていないと思われる。

37 額本は「从」も「聲」もないので「从嬴とする宋本」とは符合しない。

38『説文訂』も同様に「柔、宋本不誤。…其皁、宋本趙本…皆同。」とするけれども、これは王本の状況に合わない。

39『説文訂』は「趙本五音韻譜…皆作極。宋本葉本極作柱。」とする。

40 汲古閣本は「攢」に作るという主張に思えるけれども、汲古閣本も手偏には見えない。

41 四次様本と通行本には違いがあるけれども、『説文訂』ではこの違いがあることが明確に書かれていない。『校議』は四次様本で用いない「郁」を問題にし、「郁」を『説文訂』では引かなかった小徐本に由来するとしていることから、四次様本を見ることができなかったと思われる。

42『説文訂』は「宋本葉本誤作敲」とするけれども、毛本との区別しか記さないので、王本の「敲」も「敲」と認識していた可能性がある。

43『説文訂』『校議』とも集韻をひき、「卿」を「鄉」に誤ったと見る。

44 宋本の説解が「从禾从米庚聲」であるので、小篆の旁も「康」ではなく「糠」であるべきだが、実際には汲古閣本も宋本もそうなっていないという指摘(小篆字形は全て「康」のように作る)。孫・王・額本の全ての小篆も同様なので、ここでは説解の聲符の文字にだけ注目した。

45『説文訂』は「宋本…皆作市」と書くけれども、少

なくとも王本の状況に合わない。

46『説文訂』は「…者爲卒卒衣有題識者。宋本如此。…」と書くけれども、少なくとも王本の状況に合わない。

47 額本以外は判断が困難である。

48『説文訂』は「結也。宋本結作髻非也(漪塘所藏宋本此字缺)」とし、孫本と一致するものは『説文訂』には見えないことになる。『校議』は孫本と符合する「宋本」を見たことになる。

49『説文訂』は「宋本葉本作漕…趙本五音韻譜…皆作槽。毛本同。」とし、孫本に符合する資料は見ていなかったことになる。

50『説文訂』は「宋本葉本…誤字也。周氏宋本不誤。」とする。

51『校議議』では初印本・通行本に「二」とするものは見えず、『校議』所據本特有の誤りと見る。

52 何の資料が「𩫖、古文悖字」と言っているのか明らかでない。四次様本、通行本、五音韻譜などは全て「𩫖、籀文悖字」である。説文長箋は「當以爲古正」とするけれども、そこで古文と籀文を対立させているのかも不明であり、また既に批判が多かったこれを参照するとも考えにくい。

53『説文訂』は毛本が「灑灑」、王本が「灖灖」、周氏宋本が「泧泧」であるとするけれども、前稿で見たように王本は四次様本・通行本と同じく「灑灑」である。

54 この箇所では四次様本、通行本、孫・王・額本に違いが見られない。この後に続く「喬木聲」について、通行本・王本は正しく書くけれども、四次様本・孫本・額本が「聲」字を欠く対立を書こうとしたものを誤った可能性がある。

55『校議』の見出し字は「昦」で、早稲田所蔵通行本や日本官版に符合するけれども、京大所蔵通行本や朱筠本と異なる。『説文訂』では「篆文上从白今毛本脱首畫」で、初印本の状況を明確に書かない。淮南書局本では「臭」に作る。張行孚の校勘記ではこの差について言及がない。

56『説文訂』は「宋本作春秋傳曰…」と、王本も周氏宋本も「傳」であるかのように書くけれども、『校議』はそのような宋本を見ることができなかったと思われる。

57『説文訂』では「矯也。按宋本葉本如此。…周氏宋本及各本作驕。…」とし、『校議』とは正誤の判断が異なる。

58『説文訂』は「詩曰、𩫖沸濫泉。按宋本葉本…皆作𩫖沸。惟趙抄本此字空白。今毛板𩫖字作畢。葉本畢字空白。周氏宋本正作澤。趙本作畢。」とするけれども、王本の状況が符合しない。

59『説文訂』は「葉本周氏宋本…皆作王…。趙本…誤作五。毛本誤作主。」とし、例外的に王本の状況が読み取れなくなっている。

60『説文訂』は「古字、宋本葉本皆欠。」とし、王本でも欠けているかのように書くけれども、実際と合致しない。

61『説文訂』は、汲古閣本と差がないためか「杜林」に関しては議論しない。『校議』が新たに加えたと見られる。

62『説文訂』では「…爰於也。按宋本葉本如此。他本皆作爰引也。」とし、王本の状況とだけ符合する。

63『校議』が問題にしている点が明らかでないけれども、「中」の字形差と思われる。

64『説文訂』では「蟲行毒也。按宋本如是。初印蟲下空一字。後又依趙本補虫字。」とする。この初印本の空白については張行孚の校勘記にも記される。しかし京大所蔵の淮南書局本の本文当該箇所では、「蟲行」の間に空白はない。

65『校議』は「从屰聲」となっている資料を示さず、ここでは「あるべき姿」を書いた可能性がある。

参考文献

[1] 許慎:『説文解字』, 中華書局 (1963.12), ISBN 7101002609.

[2] 日本規格協会、国立国語研究所、情報処理学会、文字対応作業委員会:『汎用電子情報交換環境整備プログラム成果報告書』, NII書誌BA63276043.

[3] 許慎:『北宋校刊説文真本』(1713, 汲古閣本説文解字),
http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ho04/ho04_00023/index.html
また
http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/A020menu.html (2017年8月閲覧)

[4] 許慎:『嘉慶甲子歳仿宋刊本 説文解字』(平津館本

説文解字), 筆者が参照したのは国立公文書館所蔵、漢3184, 第48冊, 函号371-43

[5] 姚文田、厳可均:『説文校議』, 続修四庫全書 (2002), 経部小学類, 第213冊

[6] 田泉:「五種陳刻大徐本《説文》文字互異同挙例」, 古籍整理研究学刊 (2003/05), No.3, p.72-73

[7] 許慎:『説文解字』, 四部叢刊所収, 上海涵芬楼借日本岩崎氏静嘉堂蔵北宋刊本影印, 商務印書館 (1919).

[8] 丁福保:『説文解字詁林』, 台湾商務印書館影印 (1976).

[9] 許慎:『仿宋小字本説文解字』(藤花榭本説文解字), 額 勒 布, http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ho04/ho04_00025/index.html (2017年8月閲覧)

[10] TCA and China: “Proposal to Encode Small Seal Scripts in UCS”, ISO/IEC JTC1/SC2/WG2 N4634, 2014-09-30

[11] TCA and China: “Proposal to Encode Small Seal Scripts in UCS”, ISO/IEC JTC1/SC2/WG2 N4688, 2015-10-20

[12] TCA: “TCA Feedback on N4716”, ISO/IEC JTC1/SC2/WG2 N4755, 2016-09-22

[13] 鈴木俊哉:「清刊大徐本説文解字の版本評価の再検討に向けて」, 環境科学研究 (ISSN 1881-7696) 11巻, 2016, p.77-100, http://doi.org/10.15027/42559

[14] 周祖謨:『問学集』, 中華書局 (1966-01), 下巻, p.760-800.

[15] 倉田淳之助:「説文展観余録」東方学報(京都) 第10冊第1分冊 (1939), p.145-154.

[16] 許慎:『説文解字』, 中華再造善本, 中国国家図書館蔵宋刻元修本影印, 北京図書出版社 (2004-03), ISBN 7501322627

[17] 王貴元:「《説文解字》版本考述」, 古籍整理研究学刊 (1999 年 第6期), p.41-43, p.34

[18] 王貴元:「《説文解字》新証」, 古漢語研究 (1999年第3期), p.37-38.

[19] 許慎:『仿宋監本説文解字』, 丁艮善 (1881)

[20] 孫星衍:『平津館鑒書籍記』, 李氏木犀軒叢書, 続編の葉8からの「寫本」の最初に見える。

[21] 段玉裁:『汲古閣説文訂』, 五硯楼 (1797).

[22] 厳可均:「対孫氏問」, 心矩齋叢書所収『鉄橋漫稿』(光緒11, 1885), 巻4, 葉5-9.

[23] 顧広圻:『説文弁疑』, 続修四庫全書 (2002), 経部小学類, 第215冊

[24] 下見隆雄:「「平津館叢書」本『抱朴子』の成立について」, 福岡女子短大紀要 6 (1973), p.29-37.

[25] 鈕樹玉:『説文解字校録』, 江蘇書局 (1806)

[26] 姚文田、厳可均:『説文校議』, 説文叢刊第1輯, 広文書局, 1972. NII書誌BB01910041.

[27] 王麗雅:「鈕樹玉《説文解字校録》研究」, 民国91年(2002), 逢甲大学碩士論文.

[28] 陳茂松:「厳可均《説文校議》研究」, 民国87年(1998), 逢甲大学碩士論文.

[29] 張行孚:『汲古閣説文解字校記』、淮南書局 (1881)『説文真本』附録.

[30] 厳章福:『説文校議議』、続修四庫全書 (2002), 経部小学類, 第214冊

[31] 趙均景鈔宋大字本『説文解字』残6巻(巻1上下, 巻2上, 巻12-15上下), 大谷大学図書館所蔵.

[32] 高橋由利子:「『説文解字』毛氏汲古閣本について」, 汲古, 第27号 (1995), p.27-38

[33] 厳可均:『説文訂訂』, 続修四庫全書 (2002), 経部小学類, 第213冊

[34] 高橋由利子:「段玉裁の『汲古閣説文訂』について」, 中国文化 (55), 1997-06, p.37-52

[35] 高橋由利子:「官版『説文解字』の依拠した版本について」, お茶の水女子大学中国文学会報 (17), 1998-04, p.155-171.

[36] ISO/IEC JTC1/SC2: “Ideographic Description Characters”, Information Technology – Universal Coded Character Set (UCS): 2014-09-01, Annex I, p.2423-2426.

正誤表

広島大学大学院総合科学研究科紀要. II, 環境科学研究 12 巻,「『説文校議』に見える「宋本」と平津館本の関係について」中の表について誤りがありました。お詫びして下記の通り訂正致します。

p.16 記載の表 1 において、

箇所	誤	正
51 譱	初印本は正しく、通行本は誤る。『説文訂』はこれに言及しない。	**初印本は通行本と同じ。『説文訂』は初印本と通行本が異なるように書く。**陽に初印本に言及しないが、「今依小徐剜改作此…」とある。
75 舊	同上	**初印本は正しく、通行本は誤る。『説文訂』はこれに言及しない。**

51 譱に対する解釈は、参考文献[34]に依ったものですが、顧廣圻の原文と異なるという指摘を頂きました。